

イマージョンプログラム、空兵のキャリアを成功に導く *Wing Immersion Program sets Airmen up for Success*

June 22, 2018

By Airman 1st Class Matthew Gilmore
374th Airlift Wing Public Affairs

初仕事は、常に少しのストレスが伴う。それは実態が見えないからこそだ。初めて見聞きするものを吸収しようとしながら、訓練やマネジメントはどうか、仕事が進むかなどの不安が頭によぎる。

横田基地で6月20日、第2四半期イマージョンプログラムが実施され、参加した空兵たちは、初めての仕事にストレスなく取り組む機会を得た。

このプログラムは、横田基地で働く空軍のさまざまな専門分野の空兵たちが異業種の職場を一日体験するもので、指導を通じて世界トップクラスの空兵を育成する趣旨で四半期ごとに実施されている。参加者たちは、基地の使命を支える他の中隊の普段の仕事を体験するだけでなく、参加した空兵同士や組織間の新しい友情を育てる機会を得る。

「目的は、若い空兵の意識を向上させることだ。彼らに専門外分野の役割や全体像を実際に見て欲しい。また、普段彼らに馴染みのない分野の指導を行い、異業種への先入観をなくしたい」と第374整備中隊等時整備技師兼同プログラム計画担当官のケーシー・ジョーンズ技能軍曹は述べた。

今回のイマージョンプログラムには、第374航空機整備中隊、第374医療群、第374憲兵中隊、第374装備即応中隊、米空軍特別捜査局第6捜査中隊から5人の指導者が参加した。各参加部隊はペアを組む部隊に2人ずつ隊員を送り、自らの空軍専門職とは異なる分野の業務の一日体験を行った。

この日の組み合わせの一つは、第374装備即応中隊と第374憲兵中隊だった。憲兵は軍用犬、装備即応は物資梱包箱の組み立て業務を紹介した。交換研修に参加できた空兵たちにとって、この日の経験は忘れられないものとなった。

「今日は実に素晴らしい一日だった。装備即応中隊とペアを組み、彼らの日常業務を体験する中で、驚きや発見が沢山あった。装備即応中隊の派遣・配送小隊の隊員たちから温かく迎えられ、物資梱包用の箱の組み立てや梱包の手順を教わった。普段の自分の仕事とは全く異なるものだったが、それを体験できたことはとても充足感があった。この経験はこの先も忘れない」と第374憲兵中隊パトロール担当ポアズ・ロゲル一等空兵は一日を振り返った。

異なる空軍専門職の空兵が協力して物資梱包用の箱を組み立てながら、横田コミュニティーの軸となる絆も築いていった。

「今日、築いた部隊間の関係は特別だ」「普段なかなか仕事の現場を見ることができない業種の仲間と仕事ができただけの日だった。我々には、それぞれに与えられた仕事があるが、第374装備即応中隊の仕事を見てその役割を学んだことで、彼らの働きに対し今まで以上に感謝と敬意の念が沸いた」と第374憲兵中隊防衛運用センター管理官チャーレス・ジャウニッチ軍曹は述べた。

異なる業種の職場で一時的に数時間を過ごしたに過ぎないが、参加した空兵たちは貴重な体験を得た。

「このプログラムを体験する空兵が増えれば、空兵はより成長し、チームの団結力も強化されると思う。今日体験したことを、より多くの空兵に体験してもらいたい。専門分野の育成において、同プログラムは有益なことばかりだ。異なる職場環境を見て、普段別の分野の仕事を行う仲間と交流を図ることによって、自らの視点を変えることができる。このことは成長の面でも役立つことだと思う」とジャウニッチ軍曹は述べた。

